古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

第二部

第Ⅶ章　600 年代初頭の倭国　　「蝶の雑記帳 130-7」

『隋書』は、隋使の来た倭国がどこにあったか、
地理にまぎれが生じない精度で告げています。
朝鮮半島からの距離を比で比較すれば、『三国志』の指示と
一致します。第ｉ節、図Ⅶ.1 と図Ⅶ.2。

第Ⅶ章　600 年代の倭国 …… 221
ｉ．中国北朝の史書の示す高麗・百済・新羅・倭国の地理　222
ii．『隋書』が提示する倭国 …… 231
iii．隋使と倭国王との会見 …… 236
iv．『日本書紀』にどのように対応すればよいか …… 239
ｖ．百済・新羅・倭の王都を比較する …… 243
vi．奈良盆地の王権はどのような段階に至っていたか … 253
vii．日本列島西部全域の体制はどのようなものだったか… 258
viii．倭国中心部の地名と国名「倭」の音韻 …… 259

第Ⅶ章　600 年代初頭の倭国

200 年代中ごろ魏の使者が倭国へ来て、魏使たちの得た倭国の情報が『三国志』に記載されたあと、中国の王朝が二度目に倭国へ使者を派遣したのは北朝の隋で 608 年のことである。すでに見たように、300 年代の倭国のことが朝鮮半島の史書に記載され、400 年代には倭国の南朝宋への遣使のことが『宋書』に記述された以外には、倭国についての有用な情報はほとんどない。だから、倭国についての『隋書』の記述はとても貴重である。ところが、600 年代以後の倭国については、『日本書紀』に記載された情報で十分であるという認識が一般的である。しかし本章は、その認識が現行の日本古代史パラダイムを無批判に受け入れた先入観に基づくことを明らかにする。

隋使は魏使ほど綿密に倭国を観察し記録しなかったのだろう、『隋書』「東夷伝」の記述は『三国志』「魏書東夷伝」よりも簡略で記載する情報もどちらかと言えばおおざっぱである。それでも、魏使が出先の帯方郡から送り出された使節であるのに対し、隋使は隋の首都から派遣された官吏だった。隋と倭の外交関係は中央官庁で直接管理されたのである。倭国に来て、倭国王と会見したことなど海外への使節として把握すべき情報を報告したはずである。

ここでも最初に確認すべきことは、史書『隋書』の史料価値である。『隋書』は、唐王朝成立で主要な役割を果たした第 2 代太宗(李世民)の時代に、南朝の『梁書』などと同じ年に編纂が始まった。「本紀」と倭など外国のことを記述する「列伝」は 636 年に完成した。『隋書』の編修者たちの多くは 618 年の隋から唐への禅譲以前から隋政府に出仕していたはずで、『隋書』は『三国志』と同じく同時代史に近いと言える。360 年ぶりに大陸から海の向こうの倭国を訪れる隋使たちは、『三国志』「倭人伝」を旅行案内書のようにして読んだと推測できる。隋使一行は、自分たちの海外旅行の見聞を『三国志』の記述と比較して考えただろう。

『隋書』の記述には『三国志』とは異なる新しい情報が含まれていると考えて読解する必要がある。

ここで、『隋書』が「倭国」のことを「俀(たい)国」と表記することを注意しておこう。Wikipedia は「通説は〈俀〉は〈倭〉の誤りとする」としか書かないが、史料批判としては単純すぎるだろう。けれども、この章の最後の第vii節で試論を述べるところ以外では、簡便のため〈倭〉を〈俀〉の当て字として使用する。

ｉ．中国北朝の史書の示す高麗・百済・新羅・倭国の地理

第Ⅴ章で、『三国志』「魏書東夷伝」で使われている里単位が南朝の東晋・宋・斉・梁(りょう)・陳(ちん)でも使われたと推定した。それと対比して『隋書』の示す倭国についての地理認識を考えるために、北朝の隋が禅譲によって国家を奪い取った周(北周)の史書『周書』および北魏～隋の歴史書『北史』も合わせて比較しながら、東夷の国々の地理をどのように記述しているかを見てみよう。北朝の史書が採りあげるこの時代の東夷の国々は、高麗(こうらい)(高句麗)・百済・新羅・倭である。これら四国について『周書』・『隋書』・『北史』の記述は重なりが多いが、重なっていない有用な情報も含まれるので、並記して示す。

---------- 高麗 ----------

周書： 其地、東は新羅に至る、西は遼水を渡って二千里、南は百済に接す、北隣靺鞨千余里。平壌城に治す、其城東西六里、

隋書： 其国東西二千里、南北千余里。都は平壌城にあり、東西六里、・・・・また国内城が有り、漢城、・・・

この前に次の文がある。

(577 年)周に使を遣わして朝貢、武帝は湯(高麗王)を上開府、遼東郡公、遼東王にした。

(578 年)(隋の)高祖が受禅すると湯また使を遣わして闕(けつ)(隋の宮

殿)に詣(もう)ず、進めて大将軍を授け、封を高麗王に改めた。歳ごとに使を遣わして朝貢 絶えず。

北史：　其国、東は新羅に至る、西は遼を度(わた)って二千里、南は百済と接す、北鄰靺鞨一千余里。・・都は平壌城、東西六里、・・・。
其外復有国内城及漢城、
周の（577 年）、湯 使を遣わして周に至る，武帝 湯を以って上開府儀同大將軍、遼東郡公、遼東王と為した。
隋文帝が受禅すると、湯が使を遣わして闕に詣でたので，
進授大將軍，改封高麗王。是より歳遣使朝貢不絶。

---------- 百済 ----------

周書：　百済は、・・・故其地界東極新羅、北接高句麗、西南俱限大海。
東西四百五十里、南北九百余里。
固麻城に治す。其外更有五方：中方曰古沙城、東方曰得安城、南方曰久知下城、西方曰刀先城、北方を熊津(ゆうしん)城という。

隋書：　百済は、・・・故其地界東極新羅、北接高句麗、西南俱限大海。
東西四百五十里、南北九百余里。以下周書と同じ。

北史：　其国東極新羅、北接高句麗、西南俱限大海、処小海南、
東西四百五十里、南北九百余里。以下周書と同じ。
隋開皇の初め、余昌(百済王)また遣使 方物を貢ぐ、上開府、帯方郡公、百済王にした。

---------- 新羅 ----------

周書：　新羅国、在高麗東南、居漢時楽浪之地・・・・
開皇十四年以下、隋書と同じ。

隋書：　新羅国、高麗の東南に在り、居漢時楽浪之地、・・・
開皇十四年（594 年）、遣使貢方物。高祖 真平(新羅王)にさずけて上開府、楽浪郡公、新羅王と為す。

北史：　新羅は、其先本辰韓種也。地在高麗東南、居漢時楽浪地。
開皇十四年以下、『隋書』と同じ。

---------- 倭 ----------

周書： 記載なし

隋書： 倭国、百済新羅の東南に在り、水陸三千里、大海の中で山島に依って居す。・・・その国境 東西五月行、南北三月行、各々海に至る。其地勢東高西下。都は邪靡堆にあり、則ち魏志の所謂(いわゆる) 邪馬臺なる者なり。古(いにしえ)に云う、楽浪郡境及び帯方郡を去ること並びに一万二千里、会稽(かいけい)の東に在り、儋耳(たんじ)と相近(あい)し。漢の光武(帝)の時、使を遣わして入朝し、…、安帝の時また遣使朝貢、これを倭奴国と謂う。・・・その国大乱・・・、女子有り卑弥呼と名づく。よく鬼道を以って衆を惑わす。ここにおいて国人共に立てて王と為す。・・・その王に宮室・楼観・城柵あり、皆な兵(器)を持って守衛し、法を為すこと厳なり。魏より斉・梁に至り、代々中国と相通(あい)ず。

北史： 倭国、在百済新羅東南、水陸三千里、於大海之中依山島而居。以下も、『隋書』と同じ

上の記述を総合して整理してみよう。国勢を知っておくために、Wikipedia の記述を参照して補足する。

高麗(こうらい)：

地理的に北朝と通交の機会が多くほかの国よりもよく知られていただろう。とりわけ隋は、南朝の陳も征服して統一を果たしたあと、漢から晋の時代まで朝鮮半島に置かれていた楽浪・帯方郡を再支配することを目論んでいたから、東北地方（現代の遼寧省）から高麗までの地理に関心があった。それが、「西は遼水を渡って二千里」という記述に現われている。遼水とは遼河のことだろう。高麗の広さ「東西二千里、南北千余里」は、魏の時代と異なり、都を平壌に移し支配地が拡大したことを表わしている。距離単位が変化したことはあとで議論しよう。都の

平壌城が楽浪郡の都城を引き継いだものだとすると、東西六里も新しい里単位での広さを示しているだろう。ここには南の漢城が含まれているから、漢城を確保していた初期の情報だろう。

北周は高麗王を上開府儀同三司・遼東郡公・遼東王にしたが、隋は、ただ大將軍に進め高麗王としたと書く。上開府儀同三司は与えられなかったのだろうか。王号も、遼東王だったのを高麗王と変えている。ここには、隋が遼東を直接支配しようとしていた意図が表われている。隋は、612 年から高麗への征服戦争を始める。

百済：

百済の地理について、東に新羅・北に高句麗・西と南は海という記述が、『三国志』「魏書」の時代と大きな変化がないことを告げている。しかし、広さが「東西四百五十里、南北九百余里」とされ、里単位が異なるものになったことを明確に示している。都とされる固麻城はうしろにある熊津城のことと思われる。漢城を都としていた百済は、高麗に押されて 475 年都を錦江(きんこう)上流の熊津(ゆうしん)に移した。さらに 538 年には都を錦江中流の泗沘(しび)に移した。南の南岸地方に勢力を拡張したとしても、支配地が少し減少したと考えられる。しかし、『隋書』の書き方「東西 450 里、南北 900 里」は、『三国志』の「方 4000 里」の西半分というおおざっぱな理解だったことを示す。隋の初めに、「上開府・帯方郡公・百済王」の位を授けられている。すでにもとの帯方郡地域を失っていたのに、帯方郡公の称号を得ている。

新羅：

新羅は、『三国志』「魏書」の時代には小さな国だったが、しだいに大きな国に発展し、552 年には、高麗と百済の争いのなかで漁夫の利を得て、漢城を占領し西の海に面する地を支配下においたらしい。『隋書』は、高麗のところでこのことを認識していなかったことを示している。国力を増強した新羅は、564 年に北斉に朝貢し「使持節 東夷校尉 楽浪郡公」の称号を得ている。568 年には南朝の陳にも朝貢した。さらに南

の洛東江下流域まで支配を広げた。朝鮮半島で高麗・百済・新羅の三国が鼎立(ていりつ)する状況になった。しかし、『周書』・『隋書』・『北史』は、新興国新羅の地理を数字を示して書かず、十分認識できていなかったことを示している。ただし『隋書』は、594 年の遣使に対し、「上開府・楽浪郡公・新羅王」としたと記す。旧楽浪郡を実際に支配している高麗ではなく、新羅王に楽浪郡公の称号を与えていることにも、隋が高麗を敵視していることが表われている。

倭：

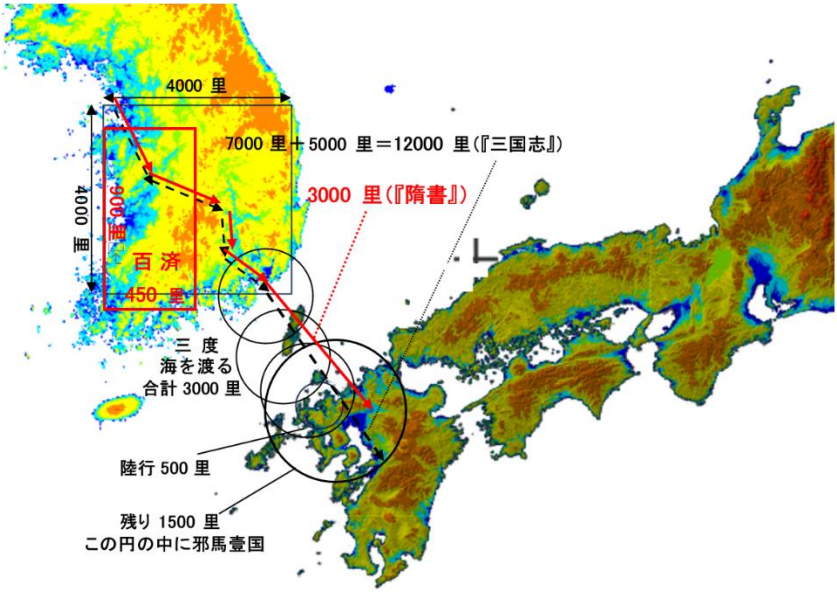
倭は、400 年代終期に倭王武の名が南朝の史書に記載されたあと、500 年代には中国の史書に登場しない。開府儀同三司を自称したが認めてもらえなかった倭王はどうしただろうか。南朝と通交しなかった時代、倭王は宮殿に「都督府」の看板を掲げたのではないかと推測して、第Ⅴ章でそこを“都府”と表現したのだけれどもそれは確かではない。隋は、王朝を建て対外的に覇権を誇示するめでたい時期に、百済と新羅に「上開府」の位を授けたが、倭は朝貢せずその位を授かっていない。しかしこれには理由がある。600 年代に入って、倭王が天子を名乗って、中華帝国の隋に対して対等外交を求めたからである。倭は、100 年余り中華帝国にいわゆる朝貢をせず、独自の道を進んだように見える。608 年二度目の遣使のとき倭王「あめ・たりしひこ」が「日出(い)ずる処の天子」と名乗ったことに、隋の 2 代目煬(よう)帝(楊広)は怒った。しかし翌年、隋の宮廷は答礼使を倭国に送った。異例の待遇ではないだろうか。

けれども今は、倭国の地理を問題にしなければならない。上の下線部が、『隋書』が把握していた倭国の地理である。同時代の地理を記そうとしているのは明らかである。『三国志』の時代の帯方郡を基準にするのでなく、昔の帯方郡境の代わりに百済と新羅を経由する倭国への距離を「水陸 3000 里」と表現している。この距離を、「古(いにしえ)」に「楽浪郡境

及び帯方郡を去ること並びに 12000 里」と言ったのだ、と。一つだけの距離で『三国志』と『隋書』を比較しても不十分だから、百済の広さと並べて対比してみよう。『隋書』のおおざっぱな把握を見ると、百済の広さは『三国志』「魏書」の言う「方 4000 里」の西半分程度ということになるから、両者の比は次の表のようになる。

	『三国志』	『隋書』	比
百済	東西 4000 里の半分	東西 450 里	40：9
	南北 4000 里	南北 900 余里	40：9
倭まで	陸と海 12000 里	水陸 3000 里	40：10

この比較から、隋の 1 里が魏の 1 里の 9/40～10/40 になったことが分かる。第Ⅴ章で推定したことが正しかった、つまり、魏・晋・宋～陳の里単位は北朝の周・隋で 40/9～40/10 倍に変更されて、1 里は長くなったのである。『三国志』「魏書」の行路記事と『隋書』の距離把握

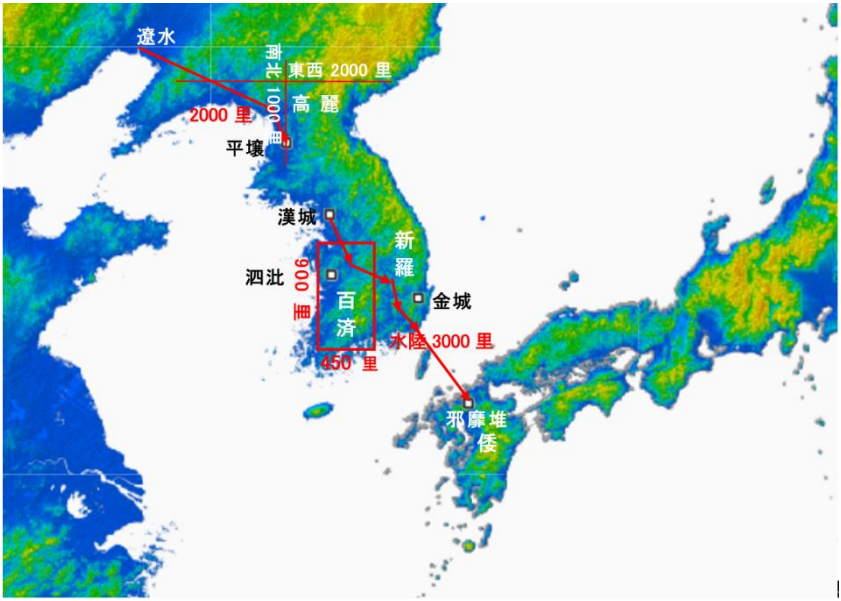


図Ⅶ.1　倭国の地理:『三国志』と『隋書』の比較

を対照して描けば、地図Ⅶ.1 のようになる。

水陸 3000 里をおおよそ直線で表わすと、『隋書』の地理記述がずいぶん粗雑に見えるが、朝鮮半島南半の陸行をどう表現するか（『三国志』は方 4000 里に対し陸行 7000 里とした）、また海路の距離把握がむずかしいことを考えれば、『隋書』の倭国についての地理把握はおおざっぱに正しいと言うことができる。『隋書』が言っているように、水陸 3000 里が『三国志』の言っていた 12000 里に相当するのである。

『周書』に出る遼水＝遼河と高麗・百済・新羅・倭を、東アジアの地図のなかに書きこめば地図Ⅶ.2 のようになる。百済の「東西 450 里、南北 900 余里」と高麗の「東西二千里、南北千余里」を現代の精密な地図と比較すると不十分だと感じられ、また、簡単に距離を見積れない朝鮮半島→対馬→壱岐→おそらく博多湾→上陸後の陸行を含む「倭まで



図Ⅶ.2　周・隋による東夷の国々の地理認識

の水陸 3000 里」は、高麗や百済の陸地の見積もりにくらべて不正確だと言える。それでも、全体として一桁の概数で表わしたものと見れば、実用的に役立つ程度に正しいと言える。『隋書』の高麗・百済・新羅・倭についての地理の把握は粗いけれども、精確な地図のなかった時代、その認識で十分機能したと考えることができる（先に述べたことを再度強調すれば、距離単位は実際の距離の比を表現するためにある）。

『隋書』「東夷伝倭国」の書く倭国についての認識をもっと確認しておこう。上に引用した冒頭の段落にある「その国境 東西五月行、南北三月行、各々海に至る。その地勢は東が高く西に下がる」は、旅程が大げさだが、東西に長く南北に短いという地形を表現しているとすればまちがってはいない。うしろの「会稽（かいけい）の東に在り、儋耳（たんじ）と相近し」の「会稽」と「儋耳」はそれぞれ杭州湾南岸と海南島を指すから、『隋書』の編者は、倭国が漠然と杭州湾南岸や海南島のような南に達すると思っていたのである。この文章を読んだ現代の歴史家はその誤りを見て、『隋書』の信頼性を軽んじたのだろう。しかしそれでは歴史資料がもつ資料性を見失うことになる。ここで必要なことは、『隋書』の編者の地理認識への批判である。上の文をよく吟味すれば、『三国志』が倭人の生活ぶりや習俗が会稽や儋耳（たんじ）と似ていると書いたことを、距離的に近いと短絡しているにすぎない。『三国志』「東夷伝倭人」などから、後世の中国の人々の倭国についての認識がそういうものになっていた、と理解すればよいのである。

そうするとこの誤解はむしろ、『隋書』の編者が、倭国が東西に長い日本列島の東にある奈良盆地のようなところにあると思っていなかったことを表現しているのである。図Ⅶ.2 の精確な地図を知らなかった編者は、九州島が朝鮮半島の南方にあり会稽の東方にあるというイメージを抱いていたのだ。ところが、地図Ⅶ.2 には長江河口と杭州湾が描かれており、九州島がおおざっぱに杭州湾地域の東方にあるという

イメージはひどく間違っているのでもない。

これまで軽視されてきたが、冒頭の段落後半の倭国の概観を述べる「漢の光武(帝)の時、使を遣わして入朝し…」で始まる小段落も、一つの積極的な意味を含んで倭国観を語っている。『後漢書』や『三国志』の簡略な要約に見えるけれども、『隋書』は、いま記述している倭国が『後漢書』の語る「倭奴国」と『三国志』の語る女王卑弥呼の国の後継国だ、と主張しているのである。だから、古(いにしえ)に云われた「楽浪郡境及び帯方郡を去ること並びに 12000 里」は単に引用したのではなく、書き出しの文「倭国は、百済新羅の東南に在り、水陸三千里」と前後で呼応する文として提示しているのである。先ほど隋使は対馬・壱岐・九州島と三度海を渡るのを確認したと言ったが、隋使は、その行程を確認し、さらに九州島に上陸してからも『三国志』の距離の記述などを点検しながら、それに大きな誤りがないことを確認した、と考えるべきである。

すなわち隋使一行は、倭国がほぼ『三国志』の書くとおりの場所にあると確認したのである。だから、この小段落の末尾に、「魏より斉・梁に至るまで、代々中国と相通じてきた」という確認の文が置かれるのである。『隋書』は、斉・梁など南朝に使節を派遣した倭国は、その前の倭奴国や卑弥呼の国と同じで、こんど隋使が行った倭国はその後継国である、と言っているのだ。『隋書』が「倭国は、百済新羅の東南に在り、水陸三千里、大海の中の山島にある」と言うのは、地名と距離単位が異なるけれども、AD57 年以来の通時的な倭国観なのである。

その通時的な倭国観は本書がここまで説いてきた倭国像に一致する。倭奴国が本書の考察している倭国であり九州北部にあったことは、金印の出土が証明している。第Ⅴ章で議論したとおりである。そして、『隋書』が記述する倭国も九州島にあったことは、図Ⅶ.1 とⅦ.2 が示すとおりである。現行の日本古代史パラダイムを信奉する人は、『隋書』の

示す倭国観だけでなく、『隋書』そのものを否定するほかに道はない。

ⅱ．『隋書』が提示する倭国

前章Ⅵは「太陽の道」概念だけを主要な論拠とし、頼りなげに思われたかもしれない。しかし、『隋書』が、600 年代に隋が使節を派遣した倭国は、邪馬壹国の後継国で宋・斉・梁など南朝に使節を派遣した倭国にほかならないことを追認したことによって、「太陽の道」の考え方が 400 年代の倭国をとらえるのにも有効だったことが明らかになった。

ところで、第Ⅵ章は、弥生時代の宝満山―飯盛山を結ぶ太陽の道が、古墳時代に大根地山―油山夫婦岩を結ぶ太陽の道に移転したと推理した。この推理を、古墳時代から後世まで宇佐宮と宗像大社という二つの神殿が存続したことが支持する。その「太陽の道」は祭政一致の政治体制を体現する象徴だったというのが第Ⅵ章の結論だった。われわれに残っている仕事は、宇佐宮と宗像大社が指し示す「太陽の道」の焦点が隋・唐の時代の倭国の首都だった、と論証することである。

倭国について『隋書』「東夷伝倭国」が記述する内容をさらに点検しなければならない。関連する重要な部分を抜き書きしよう。

ア：開皇二十年(600 年)、倭王あり、姓は阿毎(あめ)、字(あざな)は多利思比孤(たりしひこ)(註)、阿輩雞弥(きみ)と号す、使(つか)を遣わして闕(けつ)(宮殿)に詣でる。・・・、王の妻は雞弥と号す、後宮に女六七百人有り。太子を名づけて利歌弥多弗利となす。城郭(じょうかく)無し。

内官に十二等有り、一を大徳、次に小徳、次に大仁、次に小仁、次に大義、次小義、次に大礼、次に小礼、・・・

イ：大業三年(607 年)、その王 多利思比孤 使を遣わして朝貢す。使者曰(いわ)く「聞く、海西の菩薩(ぼさつ)天子、重ねて仏法を興すと。故(ゆえ)に遣わして朝拝せしめ、兼(か)ねて沙門(しゃもん)(出家者)数十人來たって仏法を学ぶ」

と。その国書に曰く「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや」云云と。帝これを覧て悦ばず、鴻臚卿(外交部署長官)に謂いて曰く「蛮夷の書 無礼なる者有り、復た以って聞かせるな」と。

ウ：明年(608年)、上、文林郎 裴清を遣わして倭国に使せしむ。百済を度り、行きて竹島に至り、南に躭羅国(済州島)を望み、都斯麻国を経る はるかに大海中に在り、また東して一支国に至り、また竹斯国に至る。また東して秦王国に至る、その人 華夏に同じ、以って夷洲となすも、疑うらくは明らかにする能わず。また十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東は、皆な倭に附庸す。

エ：倭王、小徳 阿輩台を遣わし、数百人を従え、儀仗を設け、鼓角を鳴らして来たり迎えしむ。のち十日、また大礼 哥多毗を遣わし、二百余騎を従え郊労(郊外で迎え)せしむ。既に彼の都に至る。

オ：その王、裴清と相見え、大悦して曰く「我れ聞く、海西に大隋礼儀の国有りと。故に遣わして朝貢せしむ。我れは夷人、海隅に僻在して、礼儀を聞かず。これをもって境内に稽留し、すなわち相見えず。今故らに道を清め館を飾り、もって大使を待つ。ねがわくは大国惟新の化を聞かんことを」と。裴清答えて曰く「皇帝、徳は二儀に並び、沢は四海に流る。王、化を慕うの故をもって、行人を遣わして来たらしめ、ここに宣諭す」と。既にして裴清を引いて館に就かしむ。

その後、裴清、人を遣わしてその王に謂いて曰く「朝命既に達せり、請う即ち塗を戒めよ(帰国を請う)」と。ここにおいて、宴享を設け以って裴清を遣わし、また使者をして裴清に隨い来たって方物を貢せしむ。この後遂に絶つ。

（岩波文庫本『隋書倭国伝』の読み）

(註)：インターネットには、中国の人たちのつくったWikipedia「維基文庫自由的図書館」が『四庫全書』の「二十四史」をすべて電子化していて、

閲読することができる。従来、『隋書』の倭国の条で「倭王姓阿每、字多利思北孤」と書かれているが「北」の文字は「比」ではないかという議論があったが、「維基文庫 自由的図書館」「列伝第 46 東夷」は上記のように、「字多利思比孤」としている。本書はそれを採った。

『隋書』は、邪馬壹国の時代から 350 年余り経って、倭国が時代に見合った発展を遂げたことを垣間見せる。

アの最初の 600 年の遣使のところには、倭国王の姓名が「阿每（あめ） 多利思比孤（しひこ）」と記されている。国書に署名されていたのだろう。王の姓については次章で問題にしよう。王の妻の呼称や太子の名はあとで知られたのだろう。後宮があってたくさんの女性がいたとされる。エに書かれる王と隋使との会見は立派な建物で行なわれたはずで、中国式に、王の住居である王宮とは別に公式の宮殿があった、と考えられる。

続いて、官位が 12 階に分かれていると書き、それらの位階名まで記されている。中国式の制度を採り入れて、政治体制を整えつつあることが推測される。王に従う者たちに何段階もの位階を授けることは、王権が伸長して従属するものを制度に取りこむことを促進するだろう。大きな共同体の王が中小の共同体を従属させる連合的な体制の名残が薄れていき、上下関係の系列に組み込むことが相当に進んでいたと想像できる。すでに 400 年代の南朝に使節を送っていた倭の五王の時代からそういう政治的な流れが進行していただろう。二つの神殿宇佐宮と宗像大社の創設はその趨勢の現われと考えることができる。500 年代から、高麗・百済・新羅・倭で、中華帝国の政治体制と政治思想を手本として、そういう政治制度が導入されていった、と考えてよいだろう。

もう少し 500 年代から 600 年の遣隋使までに倭国で起きたことを想像してみよう。アの文の最後には「城郭なし」と書かれている。それは中国の都市がたいてい城壁で囲まれていたこととのちがいに目が行っ

たことを表わしている。しかし、高麗の都平壌は楽浪郡を占領して奪い取ったのだから、城壁に当たるものがあっただろう。そして、百済はその高麗の圧迫によって二度遷都している。一度目の熊津(ゆうしん)は低い小山だが城構えをもつ都だったし、泗沘(しび)も北と東と南を錦江に囲まれ、北の扶蘇(ふそ)山から東がわに防壁がめぐらされていた。新羅も昔から「月城」に王宮があったが、防備の対策をした。それらが歴史家の言う朝鮮式山城である。百済が高麗に負けて亡国の憂き目にあったことは『日本書紀』にも記されている。500 年代こそ朝鮮半島で相当に発展した三つの国家が興亡をかけた戦争をした時代である。海が隔てているとはいえ、倭国が首都の防衛対策をしなかったと考えるわけにいかないだろう。

わたしは、その首都防衛の山城が先にふれた太宰府の北と南東と南西の三つの山（大城山・宮地岳・基山）に残されている城壁の跡だ、と考える。『日本書紀』の記述に誘われて、600 年代中期に白村江の戦いで負けたころあわてて朝鮮式山城を築いたとするのは、あまりに没地政学的な考えだと思う。

歴史で語られていることや遺跡などを全般的な歴史事象のなかにおいて考えなければいけない。エに書かれていることからして、おそらく倭国は隋からの使者を迎えるための迎賓館を外港と王都に建設するなどして準備をしたうえで、二回目の遣隋使を 607 年に派遣したのだと推測できる。エの冒頭には、到着時の歓迎の儀礼や、十日後に鼓笛隊や二百騎もの騎乗兵が迎えに行って都まで案内したことが書かれている。当時の東アジアで標準的な外交儀礼だっただろう。『日本書紀』がいろいろ書いているけれども、王位に就くたびに宮を変える奈良盆地の王権がそういう国家的な行事を行なえる王都を建設したかが問われなければならない。632 年に唐からの使節を迎えたとき、奈良盆地の王はまた宮を移転していたが、それでつじつまが合うだろうか。大宰府の外港博多湾で現に鴻臚館(こうろかん)が、また太宰府で客観跡が発掘された事実は重い。

倭王「あめ・たりしひこ」は南朝から異民族と見なされていた北朝に対抗心を抱いていたのだろうか。それとも、倭国の体制強化を主観的に過大に見ていたのだろうか。イには、国書に自分のことを「日出ずる処の天子」と書いたことが出ている。隋帝国 2 代目煬帝 楊広の怒りを買うのに十分だっただろう。しかし、知識人だった廷臣たちは名だけ知っていた海の向こうの倭国に興味があったのだろう、また招待されたのでもあるだろう、宮廷は翌年 608 年に倭国へ使節を派遣した。

『隋書』が書く行路記事ウの文章をよく読めば、倭国の地理がさらに明らかになるだろう。魏使から 350 年ぶりに大陸から倭国へ来た隋使は、“極東アジアの歩き方”である『三国志』「東夷伝」を案内書として携えていたにちがいない。ウの文章は、608 年に裴清（はいせい）という人が使節として倭国へ来たことを語る。隋使の乗った船は、百済の沿海を進み南に済州島を望みながら、大海中にある対馬に到着したこと、さらにまた壱岐に至り、竹斯（ちくし）国に至ったことを語る。昔の書記法では句読点が明確でないので文は切れ目なく続くように見えるが、ここで区切りを入れるのが妥当と思われる。自然の地理上、→対馬→壱岐→九州島と三度海を渡ることは、魏使の場合と変わらない。隋使は魏使と同じ海路をたどって九州島に着いた、つまり、三度の渡海を確認したのである。

続く文は、到着後のことを説明していると考えてよい。九州島に到着したがそこは竹斯国だと言っている。次の文は、隋使の一行が倭国に中国人のように見える人たちのいる国を認めて関心を示したのである。興味深いが本書では読みとばそう。続く「また十余国を経て、海岸に達す」という文はあっさり過ぎて、読む者への情報伝達量が少なすぎる。しかし次の「竹斯国より以東はみな倭に附庸する」という文は、倭国の全体像を示している。

この文は 600 年代の倭国について重大なことを証言している。愚直にこの段落を読解しよう。「倭国」という文字は、「琉球国」の記事に一度出るほかには、倭国についての記述文のなかに二度しか出ない。一度目は冒頭の「倭国は…」という書き出し文で、二度目は「裴清 倭国に使(つかい)す」だけである。「都斯麻国」に至ればそこはもう倭国だから、「一支国」から九州島に着いたところでそこを「竹斯国」と呼んでいるのは、九州島のことを竹斯という土地だと言っているのに等しい。だから、続く「また東して秦王国に至る、…、また十余国を経て、海岸に達す」の文章は、竹斯国の東は海（すなわち竹斯国は島）だと言い、前の「秦王国や十余国」はその島のなかの細部を語っているのである。そうすると、「竹斯国より以東はみな倭に附庸する」という文は、九州島より東はみな倭国に附庸（付属）する」と言っているのである。どんな理屈をこねても、この文をこれとは逆の意味に解釈することは不可能である。主語と述語と目的語の明確なこの文は、奈良盆地など東方の地域が西の竹斯国を支配していると解釈を許すような構造をしていない。

こうして、ここまで本書が議論してきたことはみな、『隋書』によって追認された。核心は、倭国が九州島にあったということである。

iii．隋使の倭国王との会見

オの隋使裴清と倭王の会見を語る文は、別種の重大な問題を提起するから、節をあらためてこの第iii節で考察しよう。

両者は会見し言葉を交わした。公式の外交場面を記述するこの文は、裴清が帰国して隋の朝廷に提出した報告文に基づいているだろう。会見での倭王の発言が、国書に書かれた「日出ずる処の天子」という虚勢を張った文章よりもずっとへりくだっているのは、隋の都での応対から学んだのかもしれない。裴清のことばが隋の皇帝の権威を負った調子なのは自然だろう。ともかく、裴清の報告書は隋の皇帝の威厳を損なわないように書かれたと考えてよい。

この会見のようすを記述したものが『日本書紀』にある。倭国と隋との外交が行なわれたのは 600 年代初頭のことだが、この時代の奈良盆地の王は推古王（593 年～628 年在位）だから、『日本書紀』は隋使との会見記を「推古紀」に記す。608 年の六月から八月の条に、会見記録が具体的に書かれている。長くなるので要約して肝心なところだけを引用しよう。一部で分かりやすい語に変更する。

カ：六月十五日、客等、難波津に泊まれり。この日に、飾船三十艘を以て、客等を江口に迎えて、新しき館に安置らしむ。・・・
秋八月の三日、“唐の客”京に入る。この日に、飾騎七十五匹を遣わして、唐の客を海石榴市の術に迎える。額田部連比羅夫、以って礼の辞を告す。十二日に、唐の客を朝廷に召して、使の旨を奏さしむ。時に阿部鳥臣・物部依網連抱二人を、客の導者とす。ここに、大唐の国の信物を大庭に置く。

キ：時に使主裴世清、親ら書を持ちて、両度再拝して、使の旨を言上して立つ。その書に曰く「・・・・・・」。時に阿部の臣、出で進みて、その書を受けて進み行く。大伴の連、迎え出でて書を承けて、大門の前の机の上に置きて奏す。事おわりて退く。この時に、皇子・諸王・諸臣、ことごとく・・・・・・。
十六日に、唐の客等を朝廷で饗応した。
九月の条に、五日に唐の客を饗応し、十一日に帰国・・・。

『隋書』がことばを交わしたことしか書かないのに対し、『日本書紀』の方では、皇帝からの文書の内容が記載されている。行為としては、隋使の携えてきた国書を、日本側の二人の臣が取り次いで王の前の机の上に置いたとされる。ともかく、隋使と倭王は対面しことばを交わし、あるいは外交文書が手交されたことを両書は認めている。

『隋書』のオと『日本書紀』のキとの記述のあいだに根本的なくいちがいは見いだせない。ところが、『隋書』にはアの文「倭王の姓名は〈あ

め・たりしひこ〉であり、妻があり後宮がある」という付帯事項が付き、『日本書紀』には推古王が女性であるという付帯事項が付くことを知れば、オの文とキの文は、二つが同時に真なる文として両立できない。『隋書』は倭王が男性であることを条件としているのに、『日本書紀』はその条件を無視して推古王が倭王だと主張するからである。一方が真であれば、他方は真であることができない。

われわれが取り組んでいるのは『隋書』が提示する倭国を理解するという課題であるが、その『隋書』が真でなければ課題自体が消失する。『日本書紀』が偽でないとすれば、『隋書』が記述する「倭国」を対象とする研究がみな無意味になるだろう。

それなのに、Wikipedia「遣隋使」を見ると、『日本書紀』の記述の説明しか書かれず、今述べた問題は問題ともされない。以前の社会科の教科書に「聖徳太子が遣隋使を派遣した」かのように書かれていたせいか、インターネットを探しても、中高生のための諸記事は「大和朝廷と隋との外交」と説明し、テストでそのように答えるように指導している。Wikipedia「遣隋使」の筆者も、基本的に習ったことをくりかえしているということなのだろう。

しかし、よく考えてみれば、「聖徳太子が遣隋使を派遣した」という理屈は、『日本書紀』「推古紀」が真でないことをとりつくろうために、女性の推古王の代わりに男性の王子で摂政とされる「厩戸王子（うまやど）」が代役を務めたとする問題先送りの方法にすぎない。歴史学の研究で、そういう問題回避法は許されない。『日本書紀』の書くことを承認する現行の日本古代史パラダイムを信奉する歴史家は、「推古王は倭国王か」という問いに回答する義務がある。

なぜ両立できない二つの見解がすれ違ったままで、他方の見解だけが世間に流布しているのだろうか。この問題は、理性推理がもたらす理

論的対立ではない。ある時代の中国の王朝が使者を倭国に送って面会してその相手が男性であったか女性であったかという現実的な事象についての悟性判断に関係するが、その悟性判断の真偽が問われているのでもない。前提の置き方が問われている。

問題は、論理の対立にではなく、『日本書紀』の立場に立つ人が置いている「奈良盆地の王は倭国の王である」という前提にある。前提を異にする理論は対立を解消することができない。『隋書』はただ歴史事象を記述しているにすぎず、そこに「男性か女性か」というような悟性判断の誤りは生じえない。現実の事象とは異質の意見「奈良盆地の王が倭国の王である」を前提として持ち込もうとするから、問題が発生するのである。

アンデルセンの寓話「裸の王様」は異なる問題構造をしているが、「裸の王様」の問題を解決するには、常識に従って端的に「王様は裸だ」と言明すればよい。同じように今の問題は、「奈良盆地の女性王は『隋書』の書く倭国の男性王とは異なる」という単純な判断を受けいれるだけで解消するのである。

論理学に疎い者はこれ以上議論を積み上げることができない。本書は、ここまで積み重ねてきた論証を真と判断しよう。すなわち、600 年代初頭の『隋書』が総括したように、倭国は AD57 年以来 600 年代まで九州島にあった、もちろん倭国王は九州島にいた、と。

ⅳ．『日本書紀』にどのように対応すればよいか

以前、『日本書紀』の編者は『隋書』を読まなかったのだろうかと思ったこともあった。しかし、『隋書』「列伝」は 636 年には完成している。700 年代に始まった『日本書紀』編修のころには、奈良盆地の政府が唐へ使節を派遣するようになって、『隋書』やそれ以前の史書を入手できたはずである。『日本書紀』を編修しようとするのにそれもしなか

ったとするのは、編者を貶めることになるだろう。

しかし『日本書紀』の編者は、無理を承知で奈良盆地の王を倭国の王と同定しようとしたのである。同じ姿勢がすでに「継体紀」にあったことは第Ⅵ章で見た。継体王を『新羅本紀』に出る倭王と同定するために、その死に方がとうてい同じとはできないにもかかわらず、継体王の亡くなった年を 3 年もずらすことをした。「推古紀」では、女性の推古王を男性である倭国王と同定することさえも辞さなかったのである。

『日本書紀』の是が非でも主張したいことは、「奈良盆地の王統が始祖王以来この日本列島を支配した」ということである。そのために最も力をそそいで記述されたのは、第一に、王統が正統な血縁関係で脈々とつながっているという点である。女性ながら奈良盆地で最初の女王となった推古王の存在は、決しておろそかにすることのできないことと言える。第二の重要事は、具体的に語られはしないが、『日本書紀』という書名が主張しているように、奈良盆地の王統が「日本」という国号の国の正統な継承権を保持してきたという点である。ところが歴代の中国王朝（とその史書）が日本列島の国家を「倭」と呼んだので、倭国というのは『日本書紀』の記述する日本国のことだという等式が必要だった。そうでなければ、日本列島に奈良盆地の王統に服属しない地域があったことになるから、奈良盆地の王統は昔から中国の言う倭国の王であったという前提が必要なのである。

本書は、これが、『日本書紀』がぜひとも「奈良盆地の王が中国や朝鮮半島の国々が言う倭国の王であった」とする理由だと考える。この要請は必須なものとなり、あらゆる理屈を超えたのだと思われる。「継体紀」も「推古紀」もこの要請を第一にして記述されている、と筆者には見える。

けれども本書は、世界史の通則どおり、日本列島も古い時代にさかのぼるほど多くの小地域が自立していた、統合は長い年月をかけて進ん

だという常識的な事態を明らかにした。そうすると、『日本書紀』は、上に挙げた二つの要請を満たすために、奈良盆地で起きたことでないことも、奈良盆地の王の下で起きたことのように記述することになる。『古事記』の記述は、奈良盆地の王家で起きた出来事を王統の系譜を中心に書かれていて、それはたしかに言われているように伝承の主題だったのだろう。しかし、口承で伝えることの可能な伝承の分量には限度があるから、『古事記』の記述量はそれほど多くない。『古事記』は推古王で終わるのだが、その兄弟王のころから分量はごく少なくなっていく。祖父の代の継体王のところには磐井の乱のことも書かれているのとくらべても、時代の新しい王たちの少なすぎる記述量は、別の史書『日本書紀』を編纂する方針が出されたことによる影響なのだろう。

新方針の史書『日本書紀』の記述量は格段に増える。近い時代の出来事についての口承や、あるいは断片的にしても記録が増えたことはあるだろう。しかし、日本列島の全般的な発展状況を想像すれば、中国と交渉の深かった九州島の先進国家倭国に出来事の記録がずっと多かったと推測できる。そこにあった資料なしに、『古事記』にくらべて圧倒的に記述量の多い『日本書紀』を編成することはできなかっただろう。だから、神話を語る神代にいくつも引用される「一書」のように、『日本書紀』には倭国の歴史資料が多く含まれる、と筆者は考える。

奈良盆地の各王の時代の事績を記述するところに、同時代と考えられる倭国の王（時代が新しければ年代は知られていただろう）の記事を挿入することが行なわれた、と筆者は想像する。そのとき、奈良盆地の王が倭国の王であったとする要請を満たすためには、記述に手を加えざるをえない。そうしてできあがった書き物は、出来事の正しい理解を妨げるものにならざるをえない。

ここまでの論証に基づいて、本書は上のようなとらえ方を仮定する。このようにとらえれば、『日本書紀』を史実を書いた歴史書と考えては

いけない。『日本書紀』は、701年に「大宝令」を発布して成立した新政府の“公認する歴史”、つまり、「過去を語るときに依拠しなければならない政府文書」として書かれた、と考えなければいけない。歴史が忘れられ『日本書紀』しか残っていなくなった後世、それは「過去を語るとき依拠せざるをえない書物になった。ときどき事実を不正に書き変えて記録していることが漏れ出る、現代の官庁の役人が記録する政府文書と同じ種類の書き物なのである。

先に『日本書紀』の神代の巻に引用されている複数の「一書」の記事が有用なことを見たが、それら「一書」は今日残されていない。神代のことを記した「一書」類には、『日本書紀』と同じように人の代のことも書かれたものがあっただろう。『日本書紀』の編修方針からして、そこに書かれていた人代の出来事は“公認の歴史書”『日本書紀』に抵触することも多かっただろう。それが人の目に触れることは許されない。『日本書紀』に抵触しない『古事記』でさえお蔵入りの憂き目にあったのだ。『日本書紀』以前にあった歴史書は、中国で起きた焚書のようにして葬り去られた、と想像される。書物を筆写する時代のことだ、そうでなくても書物は紛失しがちだったから、さまざまに記録されたはずのこの列島の貴重な歴史資料が失われたと考えられる。

唯一残された『日本書紀』から現実に起きた歴史事象を搦(すく)い取ることはずいぶんむずかしい作業だと覚悟しなければならない。本書は、中国の史書の記述をできるかぎり正しく理解して、倭国で事実起きたことを再現しようとしているが、一人の老人にできるのはその概略を解明することでしかない。あとの二章では、中国の史書で足りないところを補うために、『日本書紀』に書かれたことで客観的に見て実際起きたと考えられることだけを拾って考察を進めよう。しかしできることは限られる。未解決の多くの問題が、『日本書紀』の呪縛から解き放たれた歴史学者の勘考によって解明されることを願う。

ｖ．百済・新羅・倭の王都を比較する

本書のここまでの議論は、「600 年代初頭までの倭国は九州島にあった」という帰結をもたらした。「倭国の王都も九州島にあった」ということである。ところが、600 年代にもなって奈良盆地以外のところに王都があったという議論は、古田武彦[40]がその問題を提起するまで存在しなかった。それ以前にそういうことを述べた文献がなく、誰もそういう思念をもたなかった問題について、積極的な肯定論を展開することはむずかしい。それでも本書は、古田武彦にはなかった論点を加えて上の結論に達したので、倭国の王都についても、古田とは異なる視点も導入して議論を深めようと思う。

「倭国の王都はどこにあったか」という問いを、一般的な王都論から出発して展開しよう。歴史を通観しながらの議論は『論考 王都太宰府の歴史』[47]でしたので、この第ｖ説では、年代を追いながら探求する本書のアプローチに沿って、すでに浮かび上がっている倭国の王都候補地が王のいる都市の条件を満たすことを明らかにしたい。著書[47]では東アジアの王都を調べて、王都の具えるべき特徴を抽出した。邪馬壹国の都について述べたことと重なるが、箇条書きにすれば以下での具体的な考察を助けるだろう。

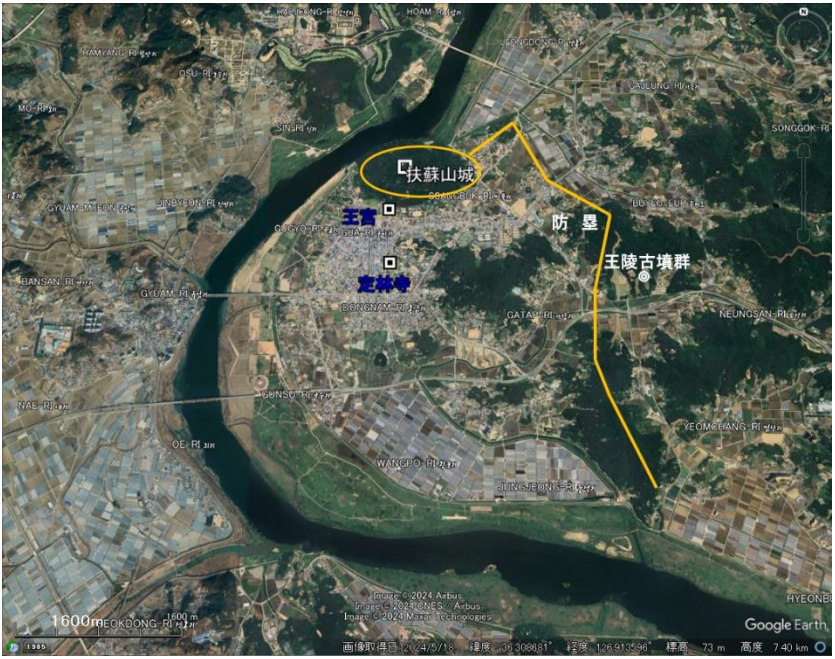
① 体制の整った国家の王都は、領国を制度的に支配する政治の中心地として王宮と政府の機関が置かれる。② 政治思想を表現する宗教的な施設も建造された。③ それらを適切に配置するために、王都にはそれを特徴づける王都プランがあった。④ 支配域全体にはそれに対応した物資の流通があり一定の経済システムが形成された。⑤ 王都はその物資の集積地だから経済システムの中心機能を果たした。中国の都城に大きな「市（いち）」が一定のプランに基づいて配置されたのはその現われである。⑥ 王都には、政治と宗教の機構を担う人々に加えて経済活動をする人々が集まり、都市を形成する。⑦ 都市としての王都が発展するには、何代もの王がその都市に王宮を置く継続性が必要である。⑧ そ

ういう王都を外敵から護るために各種の防衛施設が建設された。⑨ 仏教が伝来し普及すると、在来の宗教に加えて仏教が同じような地位を獲得し、寺院が建設された。⑩ 580年代に隋が成立すると、隋の都大興城とそれを継承した唐の長安の王都プランは、周辺の国々で王都を整備するモデルとされた。

以上の要点を念頭に、倭国が九州にあったという結論を受けいれれば、古墳時代以後の九州島全域をカバーする感のある二つの神殿をもつ「太陽の道」が、王都がどこにあったかをほとんど確定する。第Ⅰ章で提示した「太陽の道」概念からすれば、宇佐宮が真東から宗像大社が真北から指し示す場所「都督府古趾」に、その太陽の道を主宰する王がいたはずである。そして600年代末まで、その「太陽の道」以外に、それに代わるほどのものは、日本列島のどこを探しても見出せない。つまり、宇佐宮と宗像大社を神殿とする太陽の道は、日本列島で最も権威ある王の主宰した太陽の道ということである。『隋書』のいう倭国とはその王の国家以外ではありえない。そして、倭国の王都の中心点は「都督府古趾」すなわち本書のいう“都府”ということになる。

倭国の宮殿が「都督府古趾」にあったという考えを、百済の王都泗沘と新羅の王都金城と比較しながら、上に整理した王都の特徴①～⑩に照らして点検しよう。

百済は都を、538年に、475年以来の熊津から錦江を下って中流にある泗沘(現代の扶余市)に移した。泗沘の発掘調査は1990年代から本格化したようだ。Webで見つかった朴淳発著「泗沘都城」という論文[48]が泗沘の北と東に巡らされていた石を積み重ねた羅城について書いている。図が増えるのを避けるために、Google earthの地形図の中に書き入れて示そう。それが図Ⅶ.3である。



図Ⅶ.3　百済の王都泗沘

百済王は、すでに 416 年に、南朝宋から「使持節　都督　百済諸軍事・鎮東将軍・百済王」に叙任されている。泗沘に遷都したときには中国の王都についての知識は十分にあっただろう。新しく都を建設するのに、その知識を採り入れたと考えられる。Google earth で付近の地図を調べると、泗沘は西南に延びるわりあい広い平地の東北部、図Ⅶ.3 が教えるように防衛に適した地形の場所にあり、錦江が谷あいから南に出ると百済で最大の平野が南西に広がっている。戦略上最良の場所に首都が置かれた、と知られる。錦江は物資の輸送に便利で、泗沘は経済システムの中心都市としての機能も果たしたと考えられる。

王都のプランはよく考えられたものと見える。北・西・南を川に囲まれ、北にある扶蘇山を背に王宮が置かれている。遷都は高麗の圧迫を避けるためでもあるから、図に書き入れた北の扶蘇山城も東側の石垣の

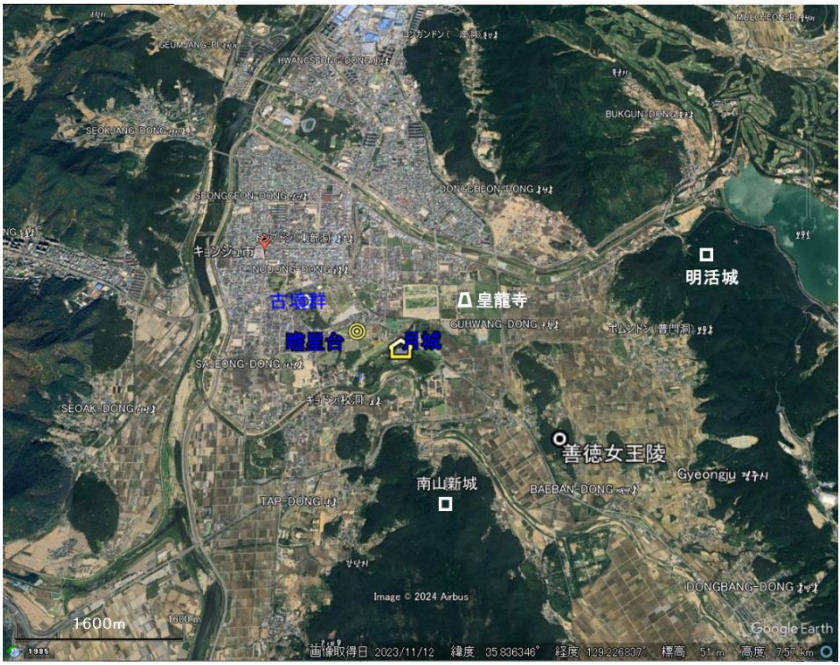
防墨も、当初から王都プランの一部だっただろう。王宮の南に東西に走る大路があり、それに直交する大路が王宮から南に延びるが、王宮からおよそ 570m 南の大路に面したところに、国家的寺院と見なせる定林寺がある。500 年代の中国の王都で、寺院は南北の大路に面する位置に置かれるのが慣例となっていた、と下倉渉の論文[49]が論じているから、定林寺は泗沘が王都として建設されると間もなく建立された、と推測できる。地図Ⅶ.3 は、定林寺の位置が相応に広い地域の中央部にあったこと、つまり、王都泗沘が広がりのある都市であったことを教える。史書が残っていず、考古学的な調査も不十分で精確には知られていないようだが、世界遺産に登録された定林寺についての Web 上の記事が 6 世紀中ごろには建てられたと言っている。この推定はおおよそ正しいだろう。次に見る新羅の金城でも大きな仏教寺院は 500 年代には建設されるようになっていた。

新しく造営された百済の泗沘は中国の外では先進的な王都だったと考えることができる。図Ⅶ.3 の左下にこの地図の縮尺が示されている。王都泗沘は、戦時態勢にあるから広くはないが、百済くらいの国土を統治するのに十分の広さをもっていた、と言うことができるだろう。

こんどは新羅の王都金城を見よう。すでに考えたように、新羅は中国文明の波及には不利な朝鮮半島の東側に在った。地図を見ても、百済ほど広い平野に恵まれていない。都の金城(現代の慶州市)は、おおよそ山に囲まれたそれほど大きくない盆地で長い年月をかけて発展した[50]。図Ⅶ.4 に見られるように、半月形の丘陵「月城」に王宮が置かれた。金城は周囲の山々で防衛されているが、図Ⅶ.4 に示されるように、東の山と南の山に二つの山城が築かれた。Web の記事によれば、東の明活城は 5km の土塁と 4.5km の石塁から成るという。その記事には 400 年以前に建造されたと書いてあったが、どうだろうか。南の南山新城は 591

年に建設され、石塁は全長 4.9km あるという。新羅最大の寺院として後世まで存続した皇龍寺は 553 年創建という。

600 年ころには、それらの建造物が金城を王都として特徴づけていた。古文献では 400 年代後半から坊里をもつ王都が整備されていったとされるようだ。論文[51]に引用された「尹武炳による慶州の王京プランの復原」を見ると（600 年代の建造物も記されている）、南北・東西の道によって区画することが行なわれたが、その地形から月城にある王宮を動かせず、中国の都城プランに倣って建物を配置することはできなかったようだ。地図Ⅶ.4 を地図Ⅶ.3 と比較すると、金城が新羅の領域で絶好の場所とは言えないとしても、広さの点で泗沘に劣るわけではないことが分かる。図Ⅶ.4 には、第Ⅰ章で議論した新羅の冬至の太陽の道も書き入れてある。瞻星台（せんせいだい）と善徳女王陵は 600 年代のものだが、

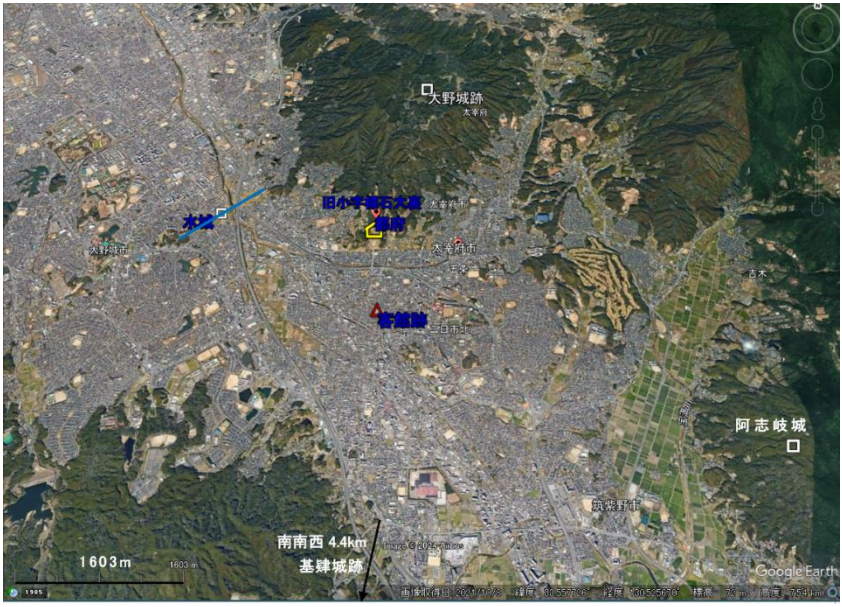


図Ⅶ.4　新羅の王都金城

王たちの古墳群―月城―狼山は 500 年代に「冬至の太陽の道」と考えられていたはずである。

図Ⅶ.4 の縮尺は図Ⅶ.3 と同じ縮尺である。二つを比較すれば、新羅の王都金城は 500 年代から百済の王都泗沘とほぼ同じ規模だった、と考えることができる。新羅が旧百済・高麗を版図に入れたあとも、その金城で朝鮮半島を統治できたことは、そのくらいの規模の王都で、歴史を経て形成された領域国家を支配することが可能なことを教えている。

それでは、本書が提案する後世太宰府と呼ばれた場所が、百済の泗沘や新羅の金城と匹敵できる王都と言えるかを比較しよう。大宰府の周辺を、図Ⅶ.3・図Ⅶ.4 と同じ縮尺の地図で示したのが図Ⅶ.5 である。図Ⅶ.5 では太宰府の政治的中心点「都督府古趾」を“都府”と書いているが、その意味はやがて明らかになるだろう。



図Ⅶ.5 倭国の王都太宰府

「都督府古趾」の石碑が立てられている場所は太陽の道の探求からたどりついた地点である。古墳時代からの大根地山―油山夫婦岩を結ぶ東西線「太陽の道」は、図に書き入れた“都府”と「旧小字標石大裏（こあざひょうせきだいり）」よりもわずかに北側を通ることはすでに述べた。だが、その「太陽の道」の標識となる霊山大根地山と油山夫婦岩はこの図の外にある。大根地山山頂から春分秋分の日の出が昇るように見える日拝塚古墳もこの図の外にある。大根地山―油山夫婦岩を結ぶ「太陽の道」は、新羅の金城の「冬至の太陽の道」にくらべるとそれほどスケールの大きいものである。その太陽の道は、さらに真東の宇佐宮と真北にある宗像神社とによって九州島全体を視野におさめるほどの規模にされた。

石碑「都督府古趾」は、菅原道真が詩で「都府楼」と呼んだそこに都督府があったと考えた人が立てたものである。菅原道真の言う「都府楼」ということばはもっと高い格式を示唆する。『日本書紀』は太宰府の「太宰」を「大宰」と書くが、初出は 609 年である。「大宰」だとしても、これほど重大な意味を帯びる名の機関が奈良盆地にはないのに太宰府という地名の残った場所にできたことは、重く受けとめなければならない。高麗や百済や新羅の王は、「開府儀同三司　使持節　都督　…」の位をもらったのだから、宮殿に「都督府」の扁額を掲げたと推測できる。倭国王は、400 年代終期の「武」のとき「開府儀同三司　使持節　都督　…」と自称したが、宋から「開府儀同三司」は認めてもらえなかった。倭王はその後南朝に使節を送らなかったが、我慢していたとは考えにくい。本書は、宮殿に都督府の看板を掲げたと推測して“都府”ということばを使っている。どんなに遅くても 500 年代のうちに、二つの神殿宇佐宮と宗像大社が指し示す「太陽の道」の焦点「都督府古趾」の場所に、中国の都督府に当たる建物があり、朝鮮半島や日本列島では宮殿と呼ぶことのできるものだった、と推定してよいだろう。

このように考えると、そこが太宰府と呼ばれるようになった理由を理解しやすい。百済や新羅が隋からまた「開府儀同三司 使持節 都督…」と認定されたときには、百済や新羅に対抗心を抱く倭国王はもっと我慢できなかったのだろう。だから、その宮殿に「都督府」よりも格の高い名を求めたというのが本書の推理である。天子と名乗ろうとする倭王「あめ・たりしひこ」が、その宮殿を中国で言えば一地方行政府にすぎない都督府のままにしておくことはできない。そこで、「太宰府」という名が選ばれたのだろう。点をもつ「太」という字は、「大大」という重ね字を意味する。『日本書紀』は意図をもって格下の「大宰」という表記を使うのだろうが、天子と名乗る倭王の政府は最高の名をもつのでなければならない。「太宰府」は、「すべてを主宰する府」を意味するのだ。

『日本書紀』に「大宰」ということばが初めて出るのは 609 年だが、隋使の来た 608 年とほぼ等しい。このタイミングは、太宰府ということばがつくられたのは隋使を迎えるころとする上の考え方を支持する。すなわち、倭王が天子と名乗って隋使を迎えるために、政府の建物に「太宰府」という扁額を掲げた可能性が高い。その後しだいに、政府の建物があるその土地を太宰府と呼ぶようになったという経緯が、最もありそうなことである。天子と太宰府ということばは倭王の虚勢をにじませるが、隋使が実際にやってくるのだから、太宰府の置かれた王都がそれなりの規模の都市でなかったらそこまでできなかっただろう。その条件を具えられたのは、そこが 400 年代の倭の五王以来何代もの王たちが都をおいたところだったからだ、と考えることができる。

図Ⅶ.5 で“都府”の北隣の目印は、その場所の小字名が「大裏」だと教える標石を示している。大裏は内裏(だいり)つまり天子の住居を意味する。実際に倭国王が天子と称していたことが、現代まで残っていた小字名が告げているのである。

600 年ころの情勢をこのように考えれば、百済の泗沘や新羅の金城と同じく、太宰府に倭国の王宮・宮殿と諸建造物を護る防衛施設があったとするのが妥当である。そして事実、図Ⅶ.5 に示すように、福岡平野からの入り口によく知られた水城（みずき）、“都府”の背後の大城山（おおき）に大野城跡、南東の宮地岳に阿志岐山城跡、南南西の基山に基肄城（きいじょう）跡がある（大野城跡に土塁・石塁の外周約 6.8km、阿志岐山城跡に推定約 3.6km の土塁、基肄城跡に約 3.9km の城壁）。ところが『日本書紀』は、これらの防御用の城が白村江の敗戦ころに建造されたと書く（阿志岐山城は『日本書紀』に書かれていない）。そして、それが通説とされている。

しかしこの通説は思考を怠っている。太陽暦 660 年 7 月、唐軍が百済の王都泗沘を陥落させて百済が滅んだ。百済の遺臣たちは百済復興戦争を始め、倭国に人質となっていた王子豊璋を呼び戻し、倭国もそれを支援した。663 年 10 月白村江の決戦で、百済・倭の連合軍が新羅軍も加わった唐軍に敗れた。『日本書紀』の記述する白村江の戦い以後の唐軍との「折衝」の経過を箇条書きにしてみよう。漢字表記の月は旧暦。

663 年八月　白村江の敗戦。

664 年五月　唐の百済占領軍から使者来訪。この年水城を築いた。

665 年八月　大野城・基肄城を築かせた。

　　九月　唐軍の使者が筑紫に来た、総勢 254 人。

668 年十月　唐軍が高麗を滅ぼす。

669 年　　唐軍の一団 2000 余人が来る。

敗戦の翌年五月に来た唐軍からの使者は文書を渡しているから、停戦交渉というよりも停戦の条件を突きつけたものと思われる。翌年にも唐軍から 254 人の一団が筑紫に来た。威圧的に停戦条件を示しながらの交渉と考えられる。そういう文のなかに、水城を築き大野城と基肄（きい）城を築いたという文が置かれている。それが本当だとすると、それらの大きな土木工事は、百済に大軍を送ったころから泥縄式に大急ぎで始まったとしなければならないだろう。工事は唐軍の使者が来るという

状況のなかでも終わっていなかったようだ。唐の軍人たちは少なくとも水城の工事を知ることができたことになる。大きな戦争に負けたなかで敵を挑発するようなことをする心理状態になれるだろうか。それでは停戦がうまく実現せず、また戦争になる恐れがある。実際 669 年にはさらに威圧的に 2000 人もの軍隊が来た。そもそも、防備もないのに、多額の費用と人的資源を要する大きな土木工事と大軍の派遣を同時に行なうことが可能だっただろうか。反対意見が出るのは必定だろう。水城や三つの山城がすでにあったから、派兵してみようということに決したと考えるのが合理的である。白村江の戦いに際しての『日本書紀』の記述は、既存の山城や水城を補修したことを表現していると解するのがふさわしい。阿志岐城が書かれていないことは、むしろそれが以前からあったことを示唆する。太宰府の入り口にある水城防塁と三つの山城大野城・基肄城・阿志岐城とはセットでなければ、太宰府という都市を守るための防衛効果を発揮できないだろう。

百済の泗沘や新羅の金城では、山城・羅城は 500 年代末までには建造が終わっているのである。200 年代以来あれほど新羅や百済としのぎを削ってきた倭国が、同じ時代に百済や新羅と同様に王都を護る城を築かなかったはずがない。600 年代の朝鮮半島ではもうそういう山城は築かれていないのに、通説が、663 年ころ建設されたとするそれらの山城を「朝鮮式山城」と呼ぶのもおかしい。比較という観点から見て、500 年代末までには三つの山城はすでにあったと判断すべきである。

百済の泗沘では、王宮の北に控える扶蘇山上に扶蘇山城が築かれると、それと連結して王都の東側を囲む石塁も築かれている。これは、現代も太宰府のランドマークとなっている水城防塁の参考になる。水城も、大野城と同じころに築かれた蓋然性が高い。隋と対等の外交関係を結ぼうとした王「あめ・たりしひこ」のころには、すでに水城と三つの山城はあった、また宮殿を「太宰府」と呼んだと考えてはじめて、607

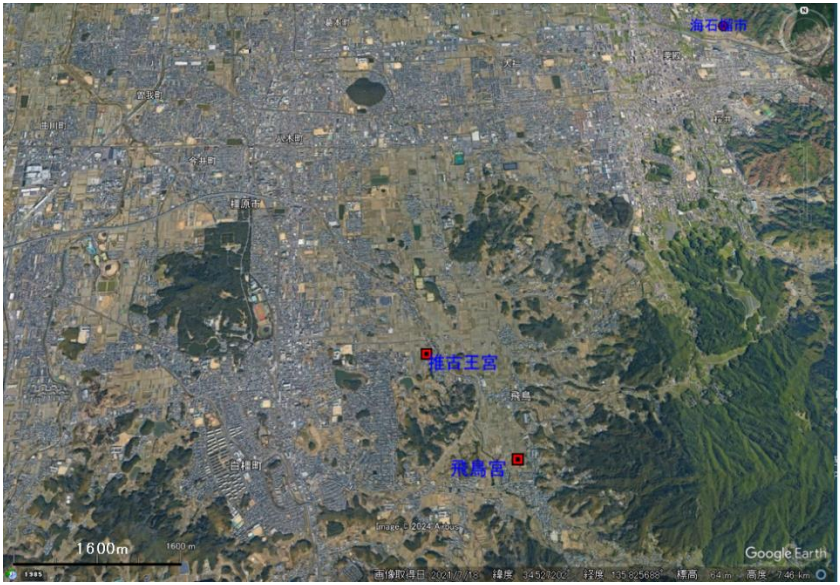
年の「日出ずる処の天子」という大げさな名乗りが可能だろう。煬帝の機嫌を損ねたのに隋が使節を派遣したのは、倭国が鴻臚館と客館を建設して受け入れ準備をし、熱心に招待したからだと推測できる。

さて、図Ⅶ.5 の縮尺は、図Ⅶ.3・図Ⅶ.4 と同じである。図Ⅵ.8 でも論じたように、太宰府という土地は王都の要件を具えている。百済の泗沘は錦江を水運に利用することができる点で優れている。ただし、水軍が王都まで迫る危険がある。それに対して太宰府には、福岡平野の北約 15km のところに外港がある。そして、図Ⅵ.8 と図Ⅶ.5 から知られるように、太宰府は福岡平野と筑後平野を結ぶ回廊に位置して、物流の要衝である。その回廊入り口に水城（北側に濠をもつ約 1.2km の土塁）がある。図Ⅶ.5 では見分けにくいが、西端の南は今では新興住宅地になっているが、もとは木々の茂った丘陵だった。だから水城は、東端と西端にある山林のあいだで、国都への関門の役目を果たすことができた。

vi．奈良盆地の王権はどのような段階に至っていたか

この章でも、奈良盆地の王権との比較をしておこう。図Ⅶ.3～5 と同じ縮尺で、600 年代初頭に推古王の宮（小墾田宮（おはりだ））のあった場所を図Ⅶ.6 に示す。Wikipedia によれば、1970 年代に発掘調査が行なわれ、7 世紀初頭と考えられる掘立柱建物群、庭園・大溝などの遺構が見つかったという。その後、そこから 500m くらい東に 7 世紀初めと考えられる苑池と石敷などの遺跡が発見され、そちらが小墾田宮推定地と呼ばれることもあるらしい（二つは雷丘の近くにある）。図Ⅶ.6 では前者に目印を置いている。奈良盆地の 600 年以降の遺跡の年代推定は、『日本書紀』に基づく編年に影響を受けている、と筆者は思う。Wikipedia「小墾田宮」には、“小墾田宮見取図”というのまで掲げてあるが、それは、隋使が来たころのことを書く『日本書紀』の記述にしたがって推定されたもので、発掘調査が明らかにした遺構の配置ではないだろう。

本書は先入観なしに、図Ⅶ.6 を図Ⅶ.3～4 と比較して、推古王の宮が百済の泗沘や新羅の金城のような王都にふさわしい場所にあったかを考える。地図Ⅶ.6 は、小墾田宮の西側と畝傍山の南側が鉄道敷設後の広い新興住宅街であることを示し、古代には木々の生い茂った山林だったと推定させる。小墾田宮あたりからのちの飛鳥宮までの 1.5km ぐらいの細長い土地は、低いけれどもおおよそ小山に囲まれた狭い小盆地であることが判る。防衛の観点からは守りやすいかもしれないが、泗沘や金城の広さとくらべてみると、ここが日本列島西部を支配する王都にふさわしい土地とは言いかねる。200 年代中期の卑弥呼の都でも、楼観や城柵があり兵士が護ることが行なわれたのである。600 年ころのここに、もっと発展した政府諸機関・王臣たちの住居・兵士の宿舎・市(いち)や商家などのある都市があったと想像することはむずかしい。



図Ⅶ.6 奈良盆地の王宮の所在地

『隋書』も『日本書紀』も、倭国王「あめ・たりしひこ」が隋使を迎えるために宿舎を新たに建てたように書く。ところが『日本書紀』は、先ほどのカの文で、「隋使が都に入り、海石榴市(つばきち)の巷(ちまた)に迎えて」泊まらせたとする。海石榴市が地図Ⅶ.6 に書き入れてあるが、そこは推古王の宮から直線距離で約 5.6km も離れた三輪山西南のふもとである。儀仗の騎馬隊 75 騎が長いパレードができるように、王宮から 5.6km も離れた辺鄙な場所を選んだ、とでもいうのだろうか。カの文の言うようにそこが王都の中でしかも都市の「巷(ちまた)」と考えることはできない。

図Ⅶ.6 を図Ⅶ.5 とくらべれば、小墾田宮・飛鳥宮のあった飛鳥が太宰府の一帯よりもずっと狭いことが判る。しかも、飛鳥周辺では見つかっていないが、太宰府では発掘調査が大宰府政庁跡の門から南に 1km 弱のところに“客館”跡を見つけている。南北の大路に面したところで、その迎賓館から儀仗騎馬隊が行進するのにも適している。ここなら、『隋書』と『日本書紀』が言うように隋使を迎える準備がなされた、と考えることができる。客館があとの時代のものだという人があるかもしれない。しかし、外国使節を受けいれるような建物が機能して一定期間役割を果たしたとすれば、修築が行なわれるとしてもたいてい同じ場所に建てられるものだ。客館跡の場所は、地図から見て都市太宰府の中心部にあったと考えられ、「巷(ちまた)」と呼ぶのにふさわしい。筆者は、その客館跡が現代も二日市(いち)と呼ばれる地域（現代の行政区は太宰府とちがうが）に位置することが偶然ではないかもしれない、と思う。

太宰府が倭国の王都としたら、すでに第Ⅵ節で考察したように、隋使を乗せてきた船が着いた港は現在の西公園の南の入り江ということになる。そして実際に発掘調査が、その南岸に海外から来た客のための鴻臚館があったことを明らかにしている。隋使迎え入れの準備は、都に客館を建て港にもう一つの迎賓館を建てて実行されたことになる。『隋書』の書くとおりのことが行なわれた、と整合的に理解することができる。

これに対して、奈良盆地で隋使を迎えたとすると、上に述べたことのほかに次のようなちぐはぐなことが行なわれたと考えなければならない。推古王が亡くなると、推古王の異母兄で夫でもあった敏達王の孫の舒明王が継いだ。Wikipedia によれば、即位の翌年 630 年に、推古王の宮のあった雷丘の近くに宮を移す（6 年後に火災で焼けて別のところに移った）。王の代ごとに新しい宮を建てるという伝統は続けられたのである。舒明王 4 年（632 年）に唐から使節が来たとすれば、王の宮は推古王のときと別の場所にあったことになる。それでは、倭国王「あめ・たりしひこ」がせっかく整備した政府の建物と王宮を無駄にしたということだ。中華帝国との外交の際に構想された方針は無視されたことになる。これは無視できるような些細なことではない。

舒明王が亡くなると、舒明王の皇后であった皇極王が継いで飛鳥板蓋宮へ移ったとされる。皇極王が弟の孝徳王のあともう一度即位して斉明王となってからは継続して飛鳥板蓋宮のあった場所に王宮を建てたと考えられ、現在ではそこは飛鳥京と呼ばれている。図Ⅶ.6 に書き入れた飛鳥宮はその場所を示している。推古王と舒明王のときには北に開けた場所にあった王の宮は、飛鳥の小盆地の奥に引っ込んだことになる。それでも、『日本書紀』は王の宮を建て替えることが行なわれたように書く。皇大神宮の建て替えのような習慣があったのだろうか。しかし、王の住居としての宮についてはそれでよいかもしれないが、そこから日本列島西部全域を支配したと考える人は、広域を統治する王の宮殿と政府諸機関の建物はどうしたと考えるのだろうか。

この規模の土地で、王が「日出ずる処の天子」然として大帝国の隋と唐から来た使節に応対した、と想像できるだろうか。『日本書紀』は百済や新羅の使節に対して見下したように応対したと書くけれども、泗沘や金城はもっと広く、王宮や寺院などすでに 500 年代に整備されていたのである。百済や新羅の使節から見ても、自国の王都の方が大きく

整っていると考えただろう。これらの矛盾した事態は、『日本書紀』の書く場所に倭国の王都があったと想定するから生じるのである。

奈良盆地の王権は、百済や新羅のような制度を整えた政府が統治するのとはちがった形態だったように思える。支配の仕方も中央政府の役人が主導的な働きをするのとはちがっていたのだろうか。587 年に起きた蘇我氏と物部氏の戦争は私闘に近いと筆者には見える。物部氏の本拠地だった大阪府まで攻め寄せての戦争は、『隋書』も『日本書紀』も十二階の位階制度があったとして示唆する制度的な統治とはちがうように見える。戦争は仏教を受容するかどうかの対立だったと語られるが、政策について王と重臣たちの政府で決定するというやり方がなされなかったように見える。それが意見の対立者のあいだの戦争になるというのも、体制の整った王国に至っていないことを表わしている。

ところで、倭国王「あめ・たりしひこ」は、隋の皇帝に「海西の菩薩天子」と呼びかけるほど仏教を重要視していたと思われる。修行僧を数十人留学させてもいるから、仏教受容から年月が経過していたと推測できる。百済での仏教受容は早く、新羅でも 553 年には国家的な仏教寺院を建てている。倭国でも 500 年代に寺院を立てるまでになっていたと想定するのが順当だろう。そうでなくては、数十人もが仏教を学ぶために中国へ留学するという状況は生まれなかっただろう。仏教の受容でも、奈良盆地は倭国よりも少し遅れていた、と推定できる。

図Ⅶ.6 に、図Ⅶ.3～5 にある山城などの王都の防衛施設を書き入れることができない。『日本書紀』が、白村江の戦いの続きのように 667 年に奈良盆地の西に高安城を築いたと書いている。しかし Wikipedia「高安城」は、明確な遺構は確認されていない、と書く。『日本書紀』の記述は、大野城などの建設の時期がピント外れで、こちらは建設の実施が疑われる。Wikipedia「古代山城」が朝鮮式山城と神籠石式山城を九州や瀬戸内海沿岸域に図示するのに、奈良盆地で山城が建設されたかどう

かが疑われるのである（倭王武の上表文が示唆する戦争の備えが奈良盆地にあっただろうか?）。奈良盆地南東部の小盆地に山城をもつ王の宮と都市を想定することはむずかしい。

vii. 日本列島西部全域の体制はどのようなものだったか

ここで、600 年初頭の日本列島西部全域の政治状況について考察を一歩進めて、次章の議論に役立つ補助線を引いておこう。一般に、のちに統合化される広い領域も、初めて統合されるまでは、どの地域も生産活動から文化や言語まで独自性を長く保っていたと考えられる。だから、それぞれの地域社会がより大きな政治領域に統合されるのに年月がかかるのである。本書のここまでの考察は、そういうわけで朝鮮半島でも日本列島でも自立的な小地域が大領域に統合されるのに年月がかかったと教える。

朝鮮半島では、比較して強力な高麗も百済や新羅を圧倒するほど強くなくて、600 年代中期まで三国鼎立の状況が続き、外部から唐が大きな戦争を持ち込むまで統一されることはなかった。

ところが日本列島では、九州島の倭国が、大陸に近い地理的条件のおかげで東の諸国を圧倒して、朝鮮半島よりも一歩先に統合化が進んだと推測される。『隋書』の書く「竹斯国より以東はみな倭に附庸する」という文がそのことを教える。倭王が一国の王者を超えた呼称である天子を自称したことや、百済や新羅が倭を大国だと見なしていると書く『隋書』の記述も、日本列島の統合化という見方を支持する。けれども、「竹斯国より以東はみな倭に附庸する」という文の「附庸」ということばは、倭国による東の領域の支配が九州島の支配とは強度に差があるようなニュアンスをにじませる。九州島が直轄領だとすれば、東方の領域の支配はそれとは異なっていたと思われる。

どこの初期古代史を見ても、のちに統合される領域で一つの強大な地域と多数の弱小地域が形成されたという状況は少ない。『日本書紀』

の記述を読んでも、奈良盆地の王権はかなり広い支配地域をもっていたと考えられる。古代日本列島で、最初に発展した倭国のほかに、奈良や吉備や出雲などのわりあい強い中領域とほかの多数の小勢力があったと想定するのが実情に合っているだろう。おそらく、600 年初頭には、倭国に次ぐ強い勢力はまだかなり自立的に中領域を支配していて、「附庸」ということばは、倭国が宗主国としてその自立的な中領域とほかの小地域を配下に置いた状態を意味する、と考えた方がよいかもしれない。600 年代初頭の倭国の体制は、制度的に統合化して進もうとする段階を迎えていたと想定しておこう。

ⅷ：倭国中心部の地名と国名「倭」の音韻

600 年代から倭国が九州島を中核にした統合段階に入ったとする判断を下したが、次章Ⅷでも同じ結論が得られる。ここで第Ⅷ章の結論もあらかじめ取り入れて、国名「倭」はどのように発音されたか、倭国中心部もしくは都の地名は何だったかを考察しよう。

中国史書で倭国中心部の地名がどのように記されたかを整理すると、200 年代の『三国志』に〈邪馬壹〉、400 年代の『後漢書』に〈邪馬臺〉、636 年に完成した『隋書』「東夷伝」に〈邪靡堆〉、676 年の註釈書『後漢書』「李賢註」に〈邪摩惟〉と書かれているということである。従来の読み方をローマ字で近似的に表わせば、200 年代に「yamayi」、400 年代に「yamatai」、630 年代に「yamatai」、670 年代に「yamawi」ということになるだろうか。

しかし、日本語の「たい」と「ゐ」は発音がずいぶん異なり、「たい」から「ゐ」への変化は非常に起こりにくいだろう。上の変化を整合的に理解することはむずかしい。考えあぐねて、手元にある 1959 年発行の角川書店『漢和中辞典』で「臺」を調べると、「臺」と「台（よろこびを意味し、怡の原字、発音は「yi」）」は元来異なる文字だったが、混

用されるようになったらしい。つまり、漢字「臺」は、もとは「台」とは異なる意味と発音をもつ文字だったがしだいに混用されるようになり、本来の意味「高殿」と発音「tai」に加えて「台」の意味と発音「yi」をもつようになったということである。

この事実を知れば、古代倭国について『三国志』の書く〈邪馬壹〉と『後漢書』の書く〈邪馬臺〉のどちらが正しいかという従来の議論は、やり直さなければいけない。筆者の試論を述べることにしよう。

最初の問いは、『後漢書』の編者である宋代の范曄が、〈邪馬臺〉の「臺」を「tai」と読んだか「yi」と読んだかである。この問いに、註釈書『後漢書』「李賢註」が回答する。李賢註を書いた人は『後漢書』の表記〈邪馬臺〉を「yamayi」と読んだということが、本文「其の大倭王は邪馬臺国に居り」に続いて「案ずるに今名邪摩惟音之訛(なまり)也」と書く註釈から判る。もし〈邪馬臺〉を「yamatai」と読んだのなら、今の名〈邪摩惟〉は「yamatai」と発音が大きく異なるから、「yamatai」から「yamawi」への変化が発音上の訛りだと判断するのはためらわれる。〈邪馬臺〉を「yamayi」と読んだから、発音が「yamayi」から「yamawi」へと変化したと言えるのである。Web 上にこの李賢註をさまざまに解釈する議論があるが、それらの屈折した複雑な解釈は「今の名○○は△△也」という単純構文が含みうる以上の論理を付加している。本書はそういう読解法を採らない。李賢註は、単純に「今の名邪摩惟は音の訛りだ」と言っていると読みとるべきである。

ここで、古田武彦が『三国志』中に「壹」と「臺」との混同はないとした調査を参考にすれば、200 年代後半の魏晋の時代、「臺」は本来の「高殿」を意味し発音も「tai」で「yi」と発音する「壹」との違いが明確だった、と考えられる。「臺」が「台」の意味と「yi」の発音をもつようになったのはあとの時代のことだろう。范曄が『後漢書』を書いた 400 年代の南朝ではそういう混用が起きていて、「臺」を「yi」の表音

文字として用いたとする上の解釈が可能になる。李賢註はこの推定を支持する。

この見方をとれば、『隋書』の〈邪靡堆〉＝「yamatai」だけが、ほかの発音「yamayi」あるいは「yamawi」と大きく異なることになる。この事態を次のように考えることはできないだろうか。『隋書』「東夷伝」の編者は、『後漢書』の表記〈邪馬臺〉を「yamatai」と読み、隋の時代の倭国の都を漢字で表記するとき同じ発音になる〈邪靡堆〉と書いた、と。そう考えると、〈邪馬臺〉と書いているのは『後漢書』なのに、『隋書』が「都は邪靡堆にある、則ち魏志の謂うところの邪馬臺なる者なり」と書いて、『三国志』「魏書」が〈邪馬臺〉と言っているように書く心理を理解することができる。編者は、『三国志』の〈邪馬壹〉を〈邪馬臺〉と読みとれないかと考えているのだろう。

だが、この見方だと、『隋書』が書く「都は邪靡堆にある」と、註釈書『後漢書』「李賢註」が書く「今の名邪摩惟」とが矛盾して、腑に落ちない。『隋書』「東夷伝」が、隋と同じく唐がまた使節を倭国に送った 632 年よりもあとに完成したこと考えると、よけいに分かりにくい。隋の時代には、倭国の都の名が知られていなかったのだろうか。あるいは、「つくり」の同じ文字〈惟〉と〈堆〉の草書体の書写のあいだに錯誤が生じたのだろうか。しかし、この疑問を追究する手がかりがない。『隋書』の書く〈邪靡堆〉に疑問符をつけたまま保留しよう。

本書は、范曄が 400 年代の倭国の都の呼び名を知っていて、それを〈邪馬臺〉と書いた、あるいは、『三国志』の発音表記〈邪馬壹〉をめでたい文字〈台〉で表現しようとして〈臺〉と書いた、とする仮説を採ろう。つまり、魏から南朝にかけての時代、倭国の中心部は、〈邪馬壹〉＝〈邪馬臺〉＝「yamayi」と呼ばれたと考えよう。そして、その発音が唐代には〈邪摩惟〉＝「yamawi」に変化したと考えよう。この解釈な

ら、起こりやすい発音の変化であり、「〈邪馬壹〉＝〈邪馬臺〉が唐代には音の訛りで〈邪摩惟〉に変化した」とする李賢註がよく妥当する。

日本語の方を考えると、「や行の yi や ye」は、古語辞典にも採りあげられず、古い時代に「わ行の wi や we」とどの程度区別されていたか不明である。むしろ、「ゐ」と「ゑ」は、子音「y」と「w」の混じったような発音で、「あ行の i と e」と区別されていたと考えるのが妥当ではないだろうか。子音に敏感な中国人が倭人の発声する「ゐ」を「yi」や「wi」と聞き取って、表音文字として漢字〈壹〉や〈臺〉や〈惟〉で表記した、と考えられないだろうか。

こう解釈すると、『後漢書』に出る〈邪馬臺〉を当用漢字で〈邪馬台〉と表記する場合も、「台」のもとの発音「yi」と読むべきである。つまり、両方とも「yamatai」と読んではいけない。本書は、この問題に関する前著[1]の考えを撤回して、〈邪馬壹〉＝〈邪馬臺〉≈〈邪摩惟〉は、「yamayi」ないし「yamawi」という読みで、ひらがな表記は「やまゐ」だと考えることにしよう。倭人の「やまゐ」の発音を聞いた中国人が「yamayi」ないし「yamawi」と聞き取ったと考えるのである。

どうも音韻の問題のように思えてきて、「倭」という漢字の読み方も気になる。調べると、Wikipedia に「倭」のページがあり、わたしの知らなかったことが書いてあった。『隋書』は「東夷伝」で〈倭〉という文字を使っているのに、「本紀」では〈倭〉と表記するという。そこで、『隋書』「本紀」5 巻を調べると、第 3 巻「煬帝上」に 2 度「倭」が出る。大業四年(608 年)三月に「百済、倭、…並遣使貢方物」とあり、大業六年春正月に「倭國遣使貢方物」とある（大業六年春正月は太陽暦で 610 年だろうか。608 年に帰国する隋使裴清を送って行った倭国の使節は、この年の正月まで滞在して朝見に参列したものと見える。これを含めて遣隋使は 3 度）。たしかに、「東夷伝」では 9 度異なる文字〈倭〉で表記しているのに、

「本紀」では〈倭〉と書いている。つけ足せば、「煬帝上」の大業三年(607年)四月の条に「度量権衡を改めた」と記されていた。

『隋書』「東夷伝」の編者は「本紀」の編者と異なるのだ。しかし、この編者の〈倭〉を〈倭〉と置き換えるやり方には根拠が見いだせない。

倭人と倭国の「倭」を古い時代にさかのぼって考えよう。志賀島で出土した金印「漢委奴國王」が、後漢のころの「倭奴国」の〈倭〉を〈委〉と表記したことで、当時の発音は〈倭〉＝〈委〉＝「wi」だと証言する。倭語で書けば「ゐ」だろう。ところが現在〈倭〉を「わ」と読むから、漢字〈倭〉の発音が「wi」から「wa」に変化したということだ。「ウィクシュナリー日本語版」によれば、日本語で〈倭〉を「呉音」でも「漢音」でも「ヰ」または「ワ」としているから、南朝や隋・唐の時代には、「wi」または「wa」と発音していたのだと考えられる。

ところが、『隋書』「東夷伝」の編者は、国名「倭」を、「wi」と読むのではなく「倭」＝「tai」と読むべきだと考えたように見える。だから、『後漢書』が「倭奴」と書いているのを大胆に「倭奴」と書き換えるようなことをしたのだろう。このやり方は、倭国の都の地名の読み方に関係しているのかもしれない。この編者は、『後漢書』の〈邪馬臺〉を「yamatai」と読んで隋の時代の倭国の都を〈邪靡堆〉と表記した。そして、『三国志』の書く〈邪馬壹〉が〈邪馬臺〉だったかのように書いた。そう考えると、都の地名の読み方で「yi」→「tai」への変更と、国名「倭」の読み方で「wi」→「tai」への変更とのあいだに対応があるように思える。『隋書』「東夷伝」の編者は、ひょっとして、都の地名の語幹を「tai」と発音するだとしたら、国の呼び名も〈倭〉(wi)ではなく〈倭〉(tai)とした方がよい、と考えたのだろうか。

ほんとうは、倭国中心部が何と呼ばれていたかを知りたいのである。しかし太宰府周辺に、「yama**」と発音するような固有の地名が見当たらない。国土地理院地図を拡大して「yamawi」に近い地名を探した

ら、太宰府市を含む旧筑前国御笠(みかさ)郡で一つだけ見つかった。現太宰府市の南側筑紫野市の「山家」である。大字名だがずいぶん広く、太陽の道の霊山と考えた宮地岳の南東部から一番大事な霊山大根地山頂上の上宮大根地神社までが「山家」で、現代流ひらがなで「やまえ」と読むようだ。「yamawi」が「yamawe」という地名に訛って周縁部に残ったのだろうか。しかし、これだけのことで判断を下すことはできない。

音韻の問題を追究しているのは、倭国中心部の固有の地名が何だったかはゆるがせにできないと考えるからである。『日本書紀』では、〈倭〉や〈日本〉を「やまと」と訓読みすることになっている。これまでこれに疑問をもった人はなかったようだ。邪馬壹国が九州にあったと考えた新井白石も、倭国が九州にあったとする新説を提起した古田武彦も、九州に「やまと」と読める地名を探した。

しかし、よく考えてみると、古代の倭人が漢字〈倭〉を何と発音したか自明ではない。〈倭〉を「やまと」と読んだという明確な証拠はない。たとえば、『古事記』の大国主神が出雲から倭の国へ旅立ったという段に、彼と妻の歌のあとに続けて「胸形(むなかた)の奥津宮にます神…」という語が出る。胸形は九州にある固有地名だから、この倭の国は九州を指すだろう。だが、九州にあった「倭」を奈良盆地の地名とおなじく「やまと」と呼んだという証拠はどこにもないのである。先入観なしに本書のここまでの議論に基づけば、九州島にあった国「倭」もしくはその中心部の名に、中国史書の提示する発音に従って「やまゐ」を対応させることしかできない。こう考えるのは厳格すぎるだろうか。この試論をさらに展開する手立てを筆者はもたないので、後続の研究を俟つことしよう。

参考文献

(1) 谷川修『倭国はここにあった　人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.

(2) 小川光三『大和の原像―知られざる古代太陽の道』, 大和書房, 1985 年.

(3) 水谷慶一『知られざる古代』, 講談社現代新書, 1980 年.

(4) 杉本智彦『カシミール 3D　GPS 応用編』, 実業之日本社, 2014 年,
最新版ソフトウェアはインターネット上のホームページ.

(5) 谷川修 電子書籍『日本神話の起源と変遷』, 白江庵書房, 2022 年.

(6) 小林健彦 「新羅国の文武王と倭国」, 新潟産業大学経済学部紀要, 第 43 号, 2014 年.

(7) 服部英二 『転生する文明』, 藤原書店, 2019 年.

(8) 谷川修 http://hakkoan.net/蝶の雑記帳, 「85 ボロブドゥール寺院の太陽の道」, 2019 年.

(9) 井澤毅 「遺伝子の変化から見たイネの起源」, 日本醸造協会誌, 112 巻 1 号, 2017 年.

(10) Shinichiro Honda ホームページ「アワ, キビの起源」, 2020 年.

(11) Xuehui Huang, Nori Kurata, *et al.* A map of rice genome variation reveals the origin of cultivated rice, *Nature* 490 (2012), pp.497-501.

(12) 倉田のり, 久保貴彦 http://first.lifesciencedb.jp/archives/ 6065, 2012.

(13) 谷川修 http://hakkoan.net/蝶の雑記帳, 「38 鵜飼と稲作の伝来」, 「38b 稲作と鵜飼をもたらした人々のお歯黒」, 2016 年.

(14) 谷川修 電子書籍『稲はどこから来たか　気候地理学的な推論』, 白江庵書房, 2022 年.

(15) Shinichiro Honda ホームページ「イネの起源 1」,「イネの起源 2』, 2018 年.

(16) S. A. Marcott *et al.* A Reconstruction of Regional and Global Temperature for the Past 11300 Years」, *Science* 399 (2013), pp.1198-1201.

(17) Wikipedia「海水準変動」, https://ja.wikipedia.org/wiki/海水準変動

(18) 近藤純正 「1993 年の大冷夏」, 天気(日本気象学会), 41 8, 1994 年.

(19) J. L. バック, 「Land Utilization in China」, 1937年.

考え方だけの孫引き.
(20) goo ブログ 地理講義 32 中国の農業 農業地図, 2011 年.
(21) https://j2.wikipedia.org/wiki/ケッペンの気候区分
(22) 宮本一夫ほか「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」, 九州大学学術情報リポジトリ.
(23) 原宗子「古代黄河流域の水稲作地点」, 流通経済大学 創立五十周年記念論文集 1, 2016 年.
(24) Robbeets M., Bouckaert, R., Conte, M. *et al.* Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages, *Nature* 599 (2021), pp.616-621.
(25) 藤尾慎一郎『日本の先史時代』, 中公新書, 2021 年.
(26) 李亨源「韓半島の初期青銅器文化と初期弥生文化」, (日本の)国立歴史民俗博物館研究報告 第185集, 2014年.
(27) 後藤直「朝鮮半島原始時代農耕集落の立地」, 第四紀研究33(5), 1994年.
(28) Yim Yang-Jai & Kira T., 日本生態学会誌 1975年, (図だけの孫引き).
(29) 佐藤洋一郎『稲の日本史』, 角川ソフィア文庫, 2018 年.
概略を「JAICAF お米のはなし 12, 14」で知ることができる.
(30) 国際気象海洋株式会社ホームページ.
(31) 中村大介「弥生時代の開始：朝鮮半島から日本列島へ」, かながわの遺跡展特別講演第2回.
(32) 可児弘明『鵜飼』, 中公新書, 1966 年.
(33) ファン ハイ リン 「お歯黒文化圏に関する試論」, シリーズ ベトナムシンポジウム 2013, 2013 年.
(34) 原三正『お歯黒の研究』, 人間の科学新社, 2006 年.
(35) 周達生 「中国の高床式住居」, 国立民族学博物館研究報告, 巻11 4号, 1987年.
(36) 浅川滋男 「中国の民家・住居史研究」, https://www.jstage. go.jp/article.

(37) 「土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム」ホームページ.
(38) T. Izawa　Reloading DNA History in Rice Domestication, Plant and Cell Physiology, pcac073, 03 June, 2022年.
(39) 井澤毅 「イネが光周性花芽形成のモデルって本当ですか？」, 時間生物学 Vol. 25, No. 1, 2019 年.
(40) 古田武彦 『邪馬台国はなかった』, 朝日新聞社, 1971年.
(41) J. ダイアモンド 『昨日までの社会』, 日本経済新聞出版, 2013年.
(42) 原田大六 『平原弥生古墳』, 葦書房, 1991年.
(43) 前原市教育委員会編 『平原遺跡　前原市文化財調査報告書 第70集』, 1999.
(44) 北條芳隆 『古墳の方位と太陽』, 同成社, 2017年, 「景観史における前方後円墳の時代, 東の山と西の古墳」, 考古学研究第59巻4号, 2013年.
(45) 妹尾達彦 「江南文化の系譜：建康と洛陽(1)」、「六朝学術学会報」14, p69, 2013年.
(46) 歴史学研究会 『日本史年表』, 岩波書店, 1966年.
(47) 谷川修『論考 王都太宰府の歴史』, 白江庵書房, 2021 年.
(48) 朴淳発 「泗沘都城」, 忠南大学校考古学科, 国際日本文化研究センター学術リポジトリ, https://nichibun.repo.nii.ac.jp.
(49) 下倉渉 「南北朝の帝都と寺院」, 東北学院大学論集「歴史と文化」40 号 p197, 2006 年.
(50) 朴方龍 「新羅王京の都市計画成立と発展」, 「東アジアの都市形態と文明史」21 巻 p65, 2004 年.
(51) 王仲殊 「唐長安城および洛陽城と東アジアの都城」、「東アジアの都市形態と文明史」21 巻 p411, 2004 年.
(52) 谷川修『日本国はどのようにして成立したか 王朝交代規範からの推論』, 白江庵書房, 2021 年.
(53) 井上光貞 岩波新書『日本国家の起源』, 1960 年.

2024年11月　立冬　　海蝶　谷川修